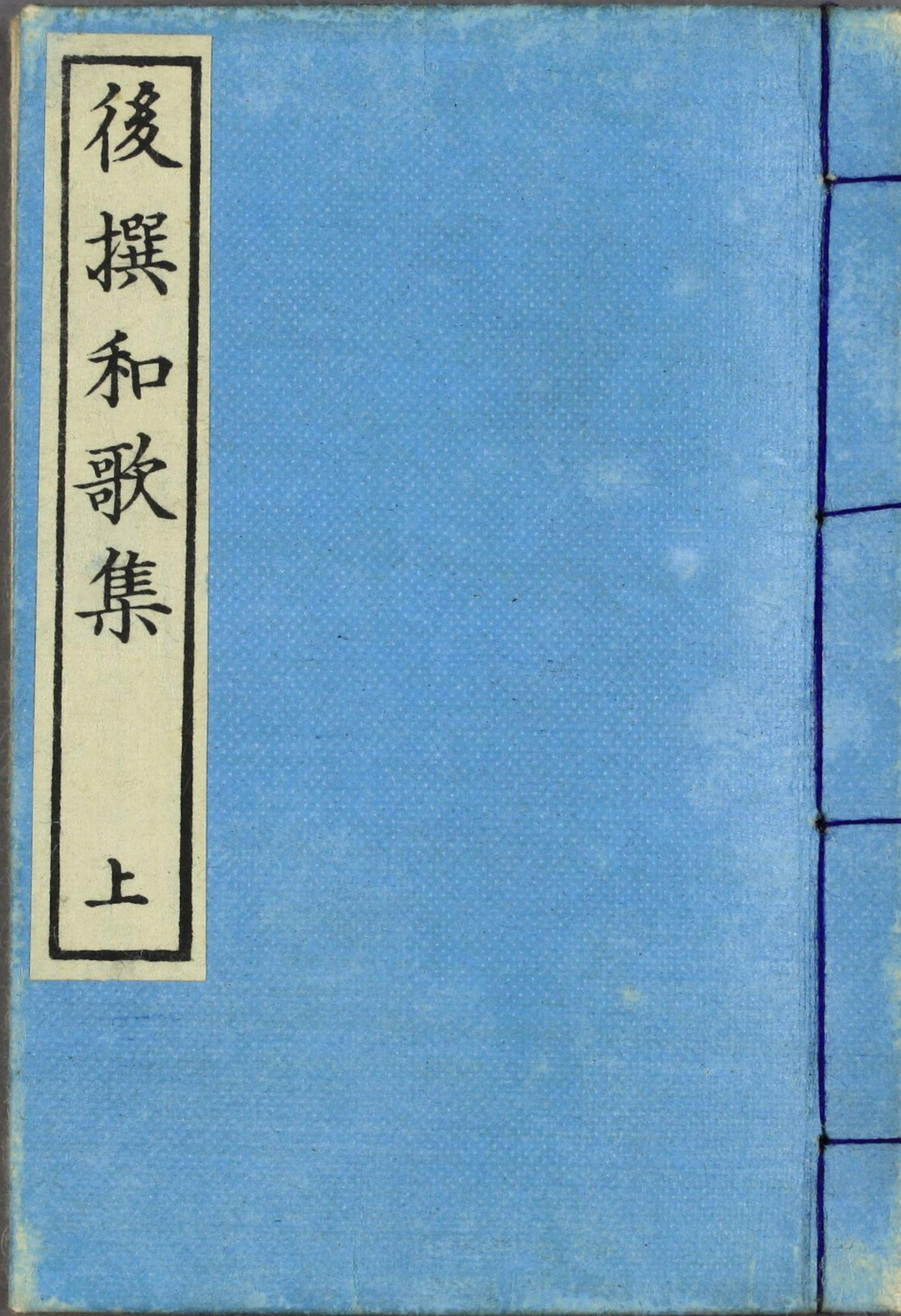
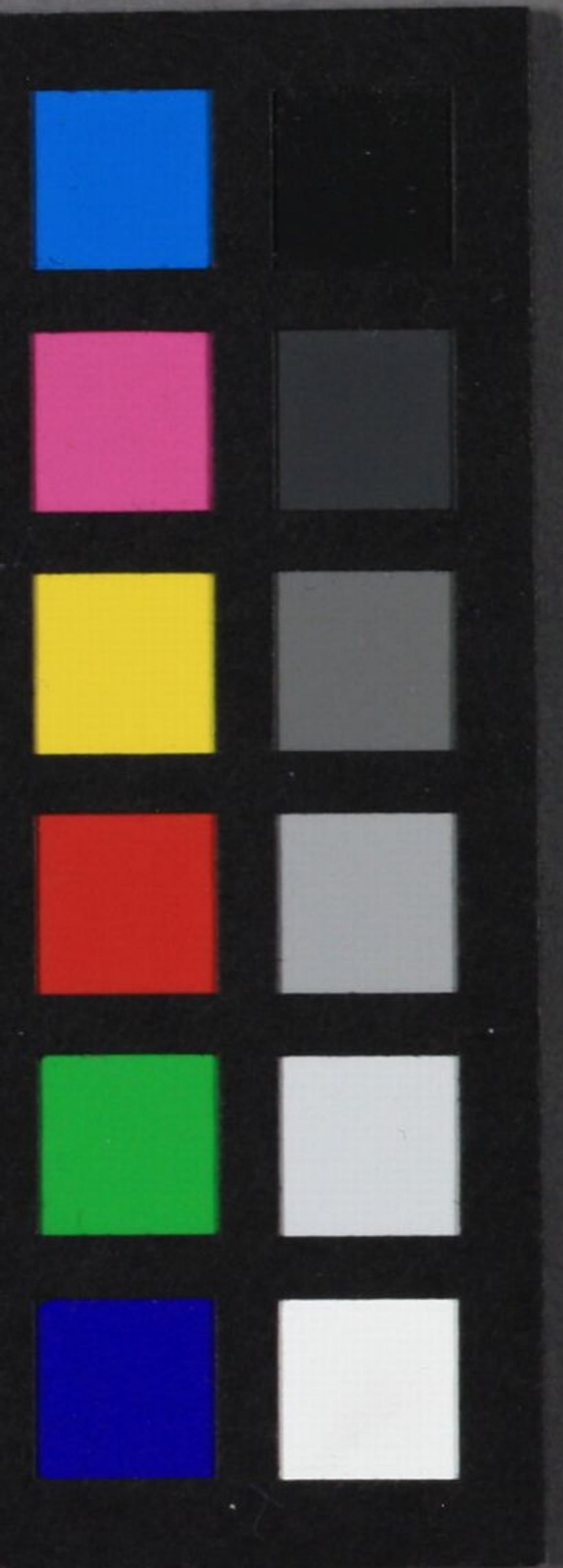


10 9 8 7 6 5 4 3

4 3 2 1

後撰和歌集

上



後撰和歌集卷第一

卷之三

と
えらう二年めもまだやりこなすが、支那でも
きとたまうりて

ああなるのいれをねどろいおまくまくひたりとかくもぐる

基を一見よ
考へて、

ある人の手元にみあひすうの女め竹けあり月見ひ

久比志郎と申す

朱雀院の子曰うおうゆけみにまるとゆうてえつう

卷之六

行氣圖

後撰

上二



院序

まゆよゆるへりあひれのまの枝はみかもなすもかひあうり
ふ日よれとこれあくよう まふいおねひよになん生
かり皆とどりけきは

云おもやせくにふすれどひきみが、我意がまみせまんこつ残

あひくよにま

處きらうあが乃枝邊のわうかにをたうみてるもはまくや
ふ日しにアケけふんせりとふぢれ待てつらアケふ
素の體みば残さむやうぬ身をとまふ事てどとア持はせ
うち多院 小子日せんとあけまく或アハのみととまくふと
古の庭くさんふゆくとひづるき残さき徳ととをアガれつてん

初志は前とそ

水志をすとあや吹みをまきやばの水とすみひどくらせ
寛平は時き七条庭のあ令のうと

ゆく風やくるをちまぬとはまづん枝すまづれおむほふり

仿明
親王

志をじひうにやドくこゑふつまであうりきるやとてやう
てはき終人のあれももあとおりひうけす竹のねとやむ
と變えすによしてアケのうりに色をあくふまめ
志をやすよりうひまわ

かきうれふおふるわうふ成らうりんとつねりかりしすうれ
生れみるかかとせりとによみみりやあ度の本の

うれやうけぬえとあうてつらへきま

もえ出於本せめ残さとしれとをなく枯み枝のは不ともれ
女のまはよまうり生く竹なるにちよみみりやあ度の本の

うれやうけぬえとあうてつらへきま

竹ふくねむのまめつひもとくらはまつらへ竹をれ
竹のまた處きくとせまじ日時ア寄したとけをとみに
歌くらは

な成さうにおうは、物を構れぬ死ぬふあやう死もとめてん

お裁ふお裁き、アヌのまなをくわうたなれ

おちりく稀 とうる壁 かひもかくまもをふのと匂ふ花うす
近春 侍時 あゆうけふにすりけふ
素すまたひまくうる余の月夜がつも花やさしく

中納言
五浦翁

すとたをひて、久保の風かや、もととく
かふりは時よりおにまむひるじうき
ほくうちんせきせりとおねぢりくそ
竹久翁十二首うち

卷之四

人のりとにづり下けふ
あまみ残つむ袖のまくらをまくらをもはゆえまう
人みづきれて仕合あひぬのやうじめありけまく
素あざくわうすありぬるあうちめにい人のまくらせんもちりけま

卷之三

まうせとすらきんとおりひ袖の毛ふくらもくほんぢやまわるすまくは
まくさんくきへきあらわくわうゆの袖乃を内にむかへりつじてん
ちどりをくわがほはじてん袖の毛つらふくの東とせふくに

卷之三

あく風うりわらびをうなん柿のもみゑうれひ松やせん
せや空比柿初えれひあわやるよ月をもみえすかふりあ
柿花よゑかくらえんわきりこうとくそももうりのゆふもアシメ
柿のま雨おまよれぬきう袖ア自ひくま山せんへほとにさく
れととにつるぐやうにうつて

四

んりておふくはわや氣味花主城とそなへたとわんたりあま
年とへてからかくらゆ女のこゝもくらうとまにまちく
きといひりあう又せうもつれありうりま
人あらぬうち持ゆされましとゆうむあ渭あゆびくねあん
をの／＼まち

卷之三

上三

わういわとひあくともむねせをかそあくふみわいきりける
こゑりまきはまろする。ハイさけう酒等へ
やりがさまあると
やあゆだら内もけあん柄のまれちるにまえひまぢわてかけ若
急情教居のねやせ生くよおれと極く仕居せしりう
の後花またなづけあと女と素その枝とれどみちり
うちよりあれひづくといひ出でけられ
素あくたまほすけ。あつたまれひづくとくをまくあらひとくをくる
まゆと穿相ふありてはれれとくにまん
まき寄牛ホイ
せしれひてひちむねせをあくとあくとひのまれあ
ふわりま
柱とをもさんとひがをもぬみまちあまんじひ先かくす
ねやのまへり行のある方にやり仕事す。高りて
竹ちりくあ床ねさせ。常民たるまけいがひきうちれを

卷之二

おのホイ
奇中
やつてひて乃ちむゆくまあくらどゝのまわりあ
ふあります
とねともんくう景かをもぬみほちあるれいもんひ先かうり
ねやのまへりけのあるにゆきりはすす 窓りで
りくお床ねをせよもたなくするまけの船ひうちれを

卷之三

もつにもまくやうくありす。乃ちよく起と起とまし事となりの者
そらたる山田志くゆふかくつむとひきめ袖ひ今いかりて
あひありてゆくよふ人のあす下かれりきるより袖の本付
タリけあれまたれんとじあひほせきそとえんとひ
くる残すちくはタリ
柄のあれ今い昔うなうねしたためゆく人われとつれもせ努力
素反あひうりそむ先やあわゆ器我をあ枝を以てもくらもあ
素の日とのつるとあうてよあれ
柄のあれちあてふなうり素反せすうもつなくくひあれアモ
かまひすく作りきる人のいのまへた高柳と思ひやりて
いもりあせもしへうたてあま高柳ふ今やなぐらうくひすの想
ねのりとにこれくれ作りて花とこやりて
ぬくみどうりとゆつのね乃りけみ居とう川宿ゆゑよ前に一枝見る
花のゆゆぢうちぬ下りうゆるゆりつねまにね志みくりちうきり
お柄の花と見えず

たわふあるの山とトかあくと

いりせあるの山邊乃ちくらむう／＼あん時どある今をま
を山あく道俗さけあ／＼けりあ／＼に

山あく山のいのたんまがのかの／＼のまくわくかま／＼
かり／＼あさくらどあ／＼とをも／＼ちのつら／＼たう／＼

桜をれをゑた／＼枝なれやくみふまれりた／＼

ク／＼

見ぬ人のくみかて／＼ちがきときおなま／＼る花柳は

さくらせつ花とよられ

あく風となしの山乃ちくらむのとまくとよられしとありを
あまきう行のゆたまくらせつ花とよられ

桜はあくよくやんくれ行の起と被乃ほとにちびてされ

影／＼は

さくら花みゆふと風くまぐれのたうあく花のあくすま

え続ゆゆのわくつく／＼はつづけあり

悟通眼

法性作

はん

ほん

立わく歌りすみのまよは山をうみあはくはまよひくの城
大城やがわむらうの神をりあまきく花と風にあかせ
やよひのつひもうよ女につるへまよふ

あけあきまよ城もうそそひれりれりくへりみくねもあく
まよのやうにおりしほきりせとくまけまのりをやく
らむくゆゆきりきりくらうへどまよひづらへうづらへ
をへりく歌あけあひまよがたうなれとたうてを歌とくをえ種
女のりくよつりやーまる

吉柳のゆきつれあくもなうゆくひれゐすむお思ひよす
漆門のじよまとあのかう門よさむけむよとせ化がりうら
とうとそあうにづらへだりせせせせせせせせせせせ

山さむがわりねまかたきくは花匂ふきうりをあうれうれ

立波ー

にわひあはきのかくねあはる植くつるもんからむ
か武よづらへーけふ

時ーのうまう元のうきりにつづれい思ひぬ山ア入やああやー

クーー

あくちよかものぬ山のかくに乃と花さうりやくまよ成うらん

歌ーうらん

まのひまは玉藻ア故不みやきはあかくとれを意もするうあ
寛永清時もれのい後年はみよこくくとれを意もするうあ

よみよたてますとてほれれ

正義句引

萬葉道
太白居

萬葉道
太白居

山りせうれのうかとす事を前にちまよはあみをほ丁ぐる

たいーらあ

はあさあ志せあうにくるふうに志せわしくもとこをぢれい

系ねのいやをあにぞくはきる

まうすくまくまよ井にあうゆくわかまよのうるな歌こ

歌ーうらん

夜うきぬ残あなく残ぬるまよのうつよなほすもくふ
思ひあうけるかとののくふもすり幸あくーときて

さうぞおこしてゐる

トからねふそくではり取

一かトモニシニイレ
モイ
ああせきくらをひそむ所。くともれのはうりにまとおなん
まもれもトリけあ人のあすもとこよみて

（おまかせのあよりに）おまかせわかれかみゆ

よふこくより城を立てて、おれが家はそぞり作らね
哉やのつれあれ、まことにそぞりよぬくひあうて、そし

主生れ乍うか左近の仕事ひ乃がさやく弔みとせく付
き多めの事あらわとくちもる及ぶ

云哥下
錦を政大臣あひうるね事後ある所にそぞのアモロウテ

アーチー
アーチー

様のそばにあわせ、やうやくちうけをとみゆきつづいた

卷之三

ゆきあふにちかたふく様むらもすぢさかひひよき

通一
居人支那に歸れどもへりてあらん

卷之三

ひつじの風を吹く
ひつじの風を吹く

女よつりわへ
人をまことと
あらゆる事に

たまらぬ
たまらぬ

までももみみゑて、午を待てば、やく、奈良あまと、おまのまに
くわくちく持て元乃、あたぬふつうに、うづくらゆうに

三卷

美道
つゝ支

庭より草の花とつもとひづりをきれ

おおきすしれおおれおおれおおれおおれおおれおおれおおれおおれおおれおおれおおれ
たはくはく

山をくみるすい成らむちふり花とよよおのんをかくわがむ
ゆく風のまくふねとはあらぬくちやむるをれおおかて高き
おとくをまちまくらうもまたとむのあらやなとみくらん
つねりせうそこきく一け女どももちのまくらを構り
花のひとおりろく一け不枝とねりてこれうあめをよ
えくらくよもあうされ

わちをのなうけまくらもあれくすけふう花とくともみん
ちのみこせあらきせるやうにをあうてつねよねぢひ
けふ人をくなんあすきれ

まの花れやくに

もみの日見絶てふれのまみふも柳もまゆとまゆのみま
まのくれよまきこれ花が一尺多ふにく

よみく

よみく

よみく

九月内
前後

よみく

よみく

かくなうちよてよ代やうはくでぬるのとだれをありとくまで
延長時辰よせかくこともかくらためよすれでおく
かくはくはくつるくに
あはせとおもかくれぬあめをひ花かがもてあめくが
景一らも
わくせふうきるまのあふうをあくひ花とんとたのあ
花のひとくくられこれわくられくちくとよくさる
つあてす

まくねを喰てふくや成ぬよまぬすまゆのうせ花すを有る
ま花尼よせうけふとよくねとよくねとよくねとよく
のよくねとよくねとよくねとよくねとよくねとよく
こひよあくとよくねとよくねとよくねとよくねとよく
まうすみ立あくねとよくねとよくねとよくねとよく
おととせりよよしたの先とよくねとよくねとよくね
を教日さし教のうらまめうとよくねとよくねとよくね

よみく

歌
くらま

常々アキラとあひておもひておまかせをすむが、おでんをみたは
りとよみとおもひ朝日のもたらすくはるはは室の
めでやれ見るもよしひなもえあふとも竹のうけ
きくあくまとじよたまなきゆ枝ふじくくみ

ふきよとをも、まほ
元のひやむじなうふに月す人たるめ、まつぢうひゆまれ
内いのおり、ろくりけ。おもとみす
わく、夜、月と花と残かく、れんぐ、をあ
あくせかと、つやあすり、もぐの波方よつて、せふ
みやと人をもが、なんせ、あくわくみれ山やさん、のま
あけのふう母子、アラキ、後もと、がせかに教わる教
ちする、あよひりあり、さくらの花せぢりけ。およは、
アモト本れりとばはれを、家の人のひしゆ、まふ
アモトより、風、ゆはれ、せんきく、もうちよふ、そとまふ

卷之二

風みもなふりゆきせんちくをれりあらぬすみうりき
様門といふ所ありとまこと
つねむりえまへおなれ様やをみゆくよすめ
せんきの山吹あるふにく
わう紅葉れひとともも山あせはまのをふもく
たいてりに
ひとせふくひさくぬ花なれむちふたれ城人をいひを
官軍の傍とればくらゑ花の宴ありもうふあめ岸りれ
素士の花れにはれすきぬきめまや移ると
いつこのくわゆうけふたりみゑつるにと
まあうれきふきあるうふ往のえせ度をみどりにとゆ渡松
女とも花さんとくせふ出く
を教くれ、花みんカイどおりあふことを時をみとめふろされ
あひしきうきぐる人あぐとくさうされまくまに

はうちへ斗茶

おとそとふにうかめまくすと花よつまとも立すくねれ
返し

たちようぬまのうすと找あはまなむ乃わくとこれいあらん

源信房
名古屋

山さくらを送す侍とく

君みよたつねすあれふ山はくらあじふ色と思ひすなん

よみ人

えやつくる女あひせみとふにすとて京力

しらべ

友あせのりとすつはせま

はみ

詠まひてあつみ里ふを無く人ちがに匂ふまれとすみす

はみ

法作よならむのんあうきりんやドとにまがうてやとぐし

はみ

く侍りてのちあひ一月と侍る人のりとより月と侍ハ

はみ

いうふを侍を侍をありやといひて侍され

はみ

みくらめ吉良山乃さくらをれ志あはまとのと見くらひつ

はみ

山さくら喰ぬとれもつ花う毛筆叶ふ言立脚すくきう

はみ

やうはくらをみて

あらかまがみつまきの成さくら花ふいちらとやきとにある

はみ

たぬくらに

我原のあけと春れすうの花立まくとも宿よれう花

はみ

花さくもあとこそくぬふくらけよう内ろふさうの山をま

はみ

人のふあこかくをうけまへ山吹のちうさうたぶと

はみ

これみよどてつらへきる

はみ

志のひうねゑ作て桂のれせ成を志ほ内ろふ山吹文せ花

はみ

余生斗せ花のさうにみちあかうきるふ

はみ

おりつまいたふかふけうれあてあくみよれ仮ほ元をく内

はみ

あくしりあ

はみ

水そこのをけあせえねりえすくせとくけて喫ふ花宿

はみ

やよひの下せ十日はうにこ條右大臣ゑ鶴谷の家不

はみ

ちかうわくうて侍る小花のをさけふやくうめをう

はみ

にくれあきお不みよたうへくる序不

はみ

かきりなれ名ふかくのれれを度ゆもあらぬちはあらう

以後ふくく匂ひては後まみれ立をかへて天とあきやう

さあけせすありさを志めぬるれを^はイも金玉あらざと思ふ

こゑふ元なしとてあそひりのかうかと侍るやうに

夜あけすきれいあうとすまそあわくふ

きのふえりえ花乃手不どきすまゆれねすそ文不乞ア

一宿のミズテ^{シテ}かづくは夜を花んとけあふ色みせんやう

あきゆふあ下ゆく水を浅ゆれとふくらむのうらとをす

たゞしきあ

うくひまのとふをみてふ玉株あされみあうそまの山うせ

さくらの花れちる残月^{シラタマ}

いのうに森をてねん橘花おりつけふのうちとみせ

ありこのみこと乃むえ侍名ふよそ

森工せう花をわすれく氣てふまとさくらふやつるふ

桜のちる残月^{シラタマ}

原作註

よみく

右大門

左大門

君浦

船岡

豊之

さくらのふきふふ衣のあうきれるる月日をおもふくもほ
你生ふうよ月のあととつは先一せうら申候う
そくくをそほあふほく一けふ

返一

あうるものとまう終きま去なれり先り人乃あらさまあやう
つゆよすうてきがみひづかとく後よけの教本竹すて
久しくまたきだらか一すか一かくにうあくる
まく你生のほこもりよつう一けふ

著者
著者

おへんとまもれかまうけりふを又々くれまへたまくわふ
めされとおみすまのあすくわゆるわおふもがぬへまくわ
よもひめつてり

二月のつともりせはひさしうあうてこゆうひひくはる
かくはおくにうれつをはうきる
まくもあん時そとおりくとがやねわくもあくわくせまくあれ
あくかくてねあくとふなんくうにまく

友前
歌トらま

卷之三

そこのつくりてんと竹引きふととゆうはまれ
郭公もあがめねちちわくはくみのむがせきこくぬ
返り

時うるまくまくとくとくそゑひふたく、残さらぬすと
ありひくべりけりんめつれれく竹くれいもゑ
乃うちねのうみをめをおきていひ入くはる
うめやまえあう頃根の卯花うじとくらもねあわむ生轟
かへり

うねあとおひひまれれれ卯花れさく教植ねともるくは
亦むじめりもよねあふあふく

时うるはれもむかとみままですり植ひもたにふるうせれ
友もちめとくひまとくぬすとくらみつうひすとく
向たうりゆきまくね乃知花ゆくもまよとふかまき
とれわす月うやまくさんまことにまくねのまにゆる卯花
をまきひぬくちりゆうき郭公あが卯花はるわあれ

知月半秋月たりほがきる旅人ふはうへけふ
あひうえぬくえぬこし山郭六月ふけよそよにみけう斗
女のゑりつうへきふ

うとひまき羽乃せよせよとまほさくにまくとあすもあ

まくとあす

木かくれてきらまつともほとまほをねあじよ枝うつ勢よ いせ
ふちうけしのみの食婦よとけむおとと人のてす
ううけふけふ又のゆーか支川もとつまでか
みふつらーきふ

いひをあむりのやせうだ川もとみゆうこそがゆいがなま
がんぎぢうつせりのんける女のくまにひづくける
がくがくせうち今むりうせきてそたのせ葵てかを成

返一

旅本多を失けてもつれわくかあひてよ茶のみとふもせ

歌へり

あひうちたれちみ杜鵑おりひとれあらぬりそなず
青人食緋あくすく時をひ乃外ふあうはうがく
白ひつ みをれそおきわゆる憂いの葉枝えむり水を
朱在院の春あふあうはゆきる時あちなまくさき
もうう清事あうアガてきけたまうたうアマ音
かねをよみ見るに
まみずれよ春せいやく春の時はとまだ第やうくひすふせん
夏衣布りやふうてとくととて
みう秋のかけゆ生にてかせ早乃ね風ぬくかとそぎく
わふくしん残
あく葉枝の山下あひがうし琴うたをふきくふう歌へ
歌へり

大喜日
降龍
辰未
酒名
大喜日
降龍
辰未
酒名

辰未
酒名
大喜日
降龍
辰未
酒名

あひの夜をあひおせじて森くちをもめらにゆくをまよ底
草すもほうふれりのを夏をもはありきかとの別あ斗栄
あひくまくゆるゆれかれもこれかねをひきへあうなき

方義
辰未
酒名

方義
辰未
酒名

つもとありて立らひけりけり

ちゆふくさむしよもとみの舞みをぬまをれす。ま
夏の夜あべへわくらしてせうけふ人のひとにす
あしたつらひきよ

名と呼ときとはたゞふかとおはねふくめをもほじるが

人のひとにつらひけり

あふかみとまかたひて夏の日せすうとをもほけよほ
うおゆくあゆくひやとまひあぬ列ふ今船のならす

夏原安玉
よひな

おりの事けりはほとまよととて

おもとまねをのそなく郭ぐゑけなまよせ枝とんかく

口ふ月をうをきふくまうくまくまとすぶす

不ととばむ成さん

やとまひまひいとあらわるゑとくのがくまみやま義

ないしほとあ

ひとと居くわおひの我と本とと支びてやがえくまろ有じ

ひとと居くわおひの我と本とと支びてやがえくまろ有じ

玉くまけのあかせほとまき守た二ゑもなれどくよお
五月はうにりのよとんふうつらうととふ
かあがく勞ふまきよへ郭ご木れをうれの移いきアゆ
歌あらず

床た向ふゆくとくなんやまきだおひだ山はあふくまん
おひくにまつそ傳え財をまきだおもてぬゆく夜をれ
こ條右大臣がねふゆきまつてのひりがよふあをう
きの残うのかととふふくらう五月あくゑすこし
きて月がやほをうけふすまけもう「んととぎ入
く侍」もとおねぞれことにくわくはうくわく立
てじくらひてあく「いませれやたのれ」まねを
くすりをうちたるくわせる月あれまやうにそくに雲がくれり
女こもと侍する人すかりふく侍うてつらひけり
名とますわくらわゆくわゆに接よせたのけうと人すがまね
歌しらむ

わひ丈乃山とよもあおもてを推うゆきをきのそせ

五月みうめのすゑひまくたけふる女のりとれ

アラモトウキル

つまどなまむふをうわとてはまよのまよをうひ

あらしらま

ちうくね花をだれよ郭とよ戎をうせふ移はきあがり
旅ねまつとひもじいとまほ林かし山不よあけてなく
友乃秋うゑに人恋を残とぞひをあらかをあくまうき
女のわどふはうたりけふそぞ車かくにまう

まうにまのをまうひうべて後ふわうまう

やとまひもうれうきとまく初くわくぬと風をあうねば

六月かく月待るみがりのまく

きみあねほり難きれあうめふいわをひまゝの残をわひま

女よどりのひくねとまくかうま

杜鵑ひとゑみあくふ夏の夜あうまき才やあこなまん

伊勢

よし

序寄之志の音ノイ
おもてく音城あ支くらひを擇は乃むたけ立ふあがくも
老きあはれに友の音葉子とく音城令とたのそ擇のはりあき
ハ金むくらまをやとひを夏官の擇すう外ふとふ人のひ
を擇乃ア急きくから物そかりふるもあ支世か往へ
人のりとたつらしき

いづれをと小金乃やほは本とまくひを角りあとする擇のそせ

歌一
歌一
歌一

郭とあく角きやうひくらひをうねのやとそそこほくを栗
人一个おわくわくや一時乃たまくあいを笑ぬきとせを年下る
コリカ高北きねふうる一擇子ひ花ふぢらか全整へ生く見若
本夏の生氣成あみをとくにまう月日をうりかなん
ととたあよおりひそめくへれぬ人の間とくちふもえあん

返一

いづれとおだもうはまむねまれを山となてとちるよ節や

夏官

よし

昨宵船底のまゝわづらふくはる時とと前のもと
おりてまちと作りまれりは花よつ赤す内はのみ乃
が手手とくと作り斗歎

をまよとひきともれく匂ふと意をさればくかあられまうきり

太政

歌一 らは

捨一のをれちうがふ故にたり我生所秋そちりくをあらし
もひやうとむふもあらなん友あれ情くははれは裡ある^{（を）}を
友のよ月の日とやくはれとは^{（い）}たのまはせをからちを努門^{（た）}る
かきとほりみねとひきてなまゆ赤い友は夜漫の月をあらる
林ちうみ夏をゆけいあとよしひなく根うゑだん地^{（ト）}をま裡
あつらはみみこめやる波とくととひきれわづらもの
かきみのうてうりつと

波とくをかくれぬものに友む乃およ解きるがりひなうきり
たい一

あやの川あまけむじ友の歌をよりる月比よとむはるか一

月うちうつしぬやありてアツイ行^{（ハシ）}きをせすはてあ
ぬとつひ事ふくのかふ
花をちうほ水ひきとむるまで君不葉がりとせふきるあわ

返一

もあとうはちうどりねぎをひうるよねうるおのとくのうり

歌一 らは

友むの身をさきとて玉わづらふとまねんひとめりみそ

友衣身 背一後くはるす

あよひうくまうむ袖の露^{（カス）}る月のあわぎや林と豆つる音
みあ月をうつ^{（ト）}一キからうにまうアリて月のあり

たとむす

かを川の水底すみくてる月残りすまんとやえりとあれ

みせ有あく所ありきる

セタをわづらうとたまかく後のみそか残る整支みをせよ

林序上

惟良の傍よせあらすか食ひ

様子を風ふきとて放ぬる様前日もよりひき

歌一うす

おつまにのとかあさ木葉ちる林前日もよりひき
ねありひきに林前日もよりひき

あめか一恋をつれは様風のまよひぬ我まよひ一モ
おりふすけりけふそら

アミー空物思ふ君のかゑのと葉平様と告る風のわひ

歌一うす

様風のうちあにそむか夕暮のそらにむぎわひりき
處わい一秋やあはきな支物残すと林風のまよひくらん

女のあらうかと月もうにつひとせくはる
秋の夜といはれ風のあらぬれ人のこらむかとれ

返一

殊をだ哉きく風をかずぬともひまかれ一空葉あらねを

草平業
車船居

涼昇御所時よりかり秋よひきると紅葉あむ月乃
空め思ひうけたぬうみ日出きう平はうせくして
やうひづらわ一言情され

歌一うす

あふ半のうれを川見平ひくと我達つまへあすと歌う

閑院

このうはわらん変もがをひかたぬうれとありふきのやう
七月七日にゆかくまでこゝとひく宿泊不無事す

タルハマトモテ

夏かくて水下しおきと大川あよひうそおこひんとやる

歌一うす

水下しおりぬき宿泊しりぬ放ぬくもあませとひまかほや
ちぬく日ふ女のひとつひ一き

たかひをあよありきと天のけらうよはわる脚も

かれよけふかとのをぬうれおまてきたりけまへ女の

よみくはる

草平業
車船居

涼昇

ひこやせまゆあよが床安いおちうみもか露すらつり
かねう人のむとて返すにこよひあんといひかきて
作りきれり

あひであなと思ふたくれまつあひてほめそりくわあくし

返一

たくひる夜物といふを放ねへ支々の身もくめやまめ身

歌一尺あ

天川あらゆる夜もうくをそああらとぬくおりの雨をあくそ
玉うらたぬもあからぬとては後まへたの赤の
株のよせころ玉一枝く支々乃わくことひの宿もじくあん
ちまうきえんとみ紫ふ今うへしてんくはまくすによくねるねを
七日の日み城後居人よつりへき。

あふ事はあらひるれい支々うかくやあん夜のほきうて
なぬうか日

支々天のとわさあまよひまくをもくとんがつるふくらん

益原教
太於臣

セヌとよあれ

あらせぬと残きわらひあき風をその船出もとくみとまと
大刀をとどけあとはまちねつ林の七日志きふぞくとまつ
京のうちや天のうちやはあせたみんとこ井とくあくたはりえ
天のなれでうかああれほの波あるうへ條わくとく

とま
とま
とま

三川せきあ白あみたりきくすまきわらきぬまうかす
秋事れいぬまうわぬ天川うりみ月ほくうる見れかわ
わぬの川うりみ月ぬ天川うりみ月ぬ袖へなまつ

とま
とま
とま

七夕せせりの空うわらの川うりみ月ぬ袖へなまつ

とま
とま
とま

林の秋れいぬまうわらの川うりみ月ぬ袖へなまつ

とま
とま
とま

たれひこの空うわらの川うりみ月ぬ袖へなまつ

とま
とま
とま

あさ戸出くなりめやまよまセヌのわくぬ別の空残あひほ

とま
とま
とま

思やう作りて

林風乃ふ奈川まことに便びを覺のとひく思ふものあり

たひくとあ

よみ人

ま月む志初ア冬さくふ林させのあら山より音きくあまう
於くやる音はうへていな魚くじ林風はせかりふつ木こゑ
秋の音ふ葉紫雲をよびて吹をくみゆのうかのひくじのてお
日くじに秋すく山石をなれやなまつが風へ入日さだらん
日くじに秋すく山石をなれやなまつが風へ入日さだらん
あうありてゆりつるり日くじに秋すく山石をなれやな
林風乃あたくふよしきまうに音の根にてふみぞれまう
わくとくを皆やうか支ぢりす音のゆくう不候せきくじく
こんとひく移やを経ぬ林めふるれま月の秋すく忠き
秋の歌ふ本やくとも人もおもへを往と下のそとくらん
あき風のやく歌くまうのおりみある秋すく忠き
秋すくれ歌もせふものありみある秋すく忠き
風きみなく松むけ後ア音の音をくる音やと枝くら先

業平
秋月
よみ人

音歌
よみ人

林風のいき松を山からうをみちうがくとせすある
これまたのみあのあうとあもせふ

みあせ
あくみ

松のいふ風のいきど下りせくらる因娘ア林をひくじ
林た胸くらつまちのやくらる處うけりあるふ秋め
葉に布と成すてつうやきあ

た太郎

小林
風歌

林ふを出ねひくふりせりと音を林風えすすや黒てん
すうかくこえみいひる女のひくじにつやふきれを
以下ひくじりいひつらへけふ

た太郎

小林
風歌

あ葉くじにあよたのと成すて秋うれの音を林風ふあ

返樹

夏詠文

人りそかねやド田乃むち田を思はむら福くら人ふあ

歌あつあ

夏詠文

妹哥中

延喜序時林奇りうきまれひかまやうつゝけふ
林さうせらぬふと便りくらゆ山お海つり風くそみへ娘である
花つるす出かゝるものと妹のをさうによよひてくふの事一つ

寛平序時まひのめやせを金に

獨ちあくと妹さうれも内やく煙どみを焚ひまうり斗歎

かず一序時の女らを合ひ

かくにわらゑをうなねねにあしゆきに聞く
妹の時代ふくらむ女良花をふくくなまねきつやあら
かく風ぐものごろ乃わこなれの林ふのそとあひわうる
をばくかくさかに付りあるふせんてひの序名をす
りす。序返す

八月夏おみきみにそにひくやの盆をする妹そひく
序クー

おゆきと素林をわひ支時あれと露東かづらん袖どくを累

延喜
文房
滑製

益原
長尾
後子

高亭子院の夜まくのをあせびくかく後くあき露
比とけりあ残りてアシセキササたゞひす
白露せきるをなふりかくめむありての後もやうきの残
作返

法空
作勢
作製

うごかく志り志めゆの花なれいふくとてや露をすらす
を樹う後涼及早すけうけあはよ多つわより女良花を残
おりくづり一き幕

かてみ軽袖まくはりどまく下あ京支わく今やあらん

右大房
大浦

美代おとせん露を女良花をなにか手くらゆる覺

右大房
大浦

今のもやおとせん露せんぞくまでとせや種あけ 大浦

返一

あひ一里もほりけあまめうれあらむて仕りタカモ

右大房
大浦

ひきりととくらけりまうひ月をうりにさんあせり
とうまくかづれをもといひとせと作りまわる

白露のうへもつれふくわむる川の下葉を残て秋尼

返

よみ人

さうをなまくわらふねく風ふうとあをすむ
かくこのうきよつりーけふ

人ちゆきあと枝とまあなめにそゑの露草に林もーら野
人の毛にかたれりぬくたうほとぼうアーナリされ

返すに思ふ草残へーく

をもじらか等とこなきやとむじゆふのまどこぞ花

返一

布をせかうあぬを我みみまねくおれか入やとゆると
歌ーう

林の後残ひつにのこをとわらは露のあまねう(おそ有斗)あ
かくす(おと)白露もととくらへてこぞりる(りうき)れ

中主音
定音

蟲あら勢我身を思へと株のを残らくとおせおまわあうと
あまのうちわひある。不ア女ともせひまくちのうちか
竹のふもととくらへみりとしとしとしなれすかくち
あく蟲のむにあまみれ聲生れ花乃くらへもとあくさん
八月十九日十日ちくうふぬのをかす日をみあアから
すあちつてのむらへと聲ふ生てをくく(ア)くられ
つらへしきる

うもての月もまつてとみなし風あらとひ思ひたまくは

歌ー五

秋の田代う向か店の匂ふまで露の林をだんとあらぬも
あきのよ成まと経あひのこがまと歌ひの夏ちとたのもれぬ
ニ秋の光をかうて人よつとすとく
あくれあくへれりふるぎをあらあちうあらかわふ林をむ
株のうことす

ゆまうかうてかさんわふらふ露をちとほれむの株の

歌

わうやと乃たの妹を紀ちりぬわう後こんくやくやとおえん

白はゆれをうはくおき妹萩とおりてにけんにあやうすす堂

とのつまうにうるうとれこまくわくつわく

妹を紀のうかわすとひづるにあまかとくとくをくみき

歌一叶も

秋の田乃ありやせののと島とあるわうふじの露ふねきは
我袖ア露そぞくがふあドナシ雲のあうみ浪やこすさん

妹萩乃枝をとぞくかうういり白露どりへさけの秋きう

わうやくの尾をれうの白露とさくすてわまねく物をう

延森の時時うくめーまれ

さとーらはるなすとあ、秋を紀ふとせふ白露むけむ
あたの妹を草葉と素みへあにとぞ、露とゆくさん
白露よ風のあ行く妹乃妹をつねまとあぬあそちうきる

秋の秋ふとくちく露とまきとまきひ葉や安うとわううれつ

あふ一叶も

宗子
松子

はく

はく

はく

大智大
宣傳製

はく

あきのよし月乃おひきれと人のあひだをアリておき
秋乃月つよかくてふ物ぢらひやみふあることはすうきく

八月十五夜

八月十八日
月と月を月とね妹になき、もみをねてまよひゆうじま
月と月をね妹の夜とつまくみゆふあうたを
月とみます。

原序

かとぞ秋も松やかなさんさんと六月のかつてをもくらす
夜よひのゆゑもあらねと月影とたまうぬ林の方とこまみき
も河あらまよまままくとめをんあらひあらう月やよおせと
林風アキナリやえらん大川よるゆく月志なうお
林くねりありよこころとみれつまゆり立ち草とおほくじりさう
消えりうねやあきはるも工藝渡の月がさみちあすきれ
吹風年あらわあらわのむふりいは林めく成凌くとおもくん
惟貞の傳よれお乃可令のう
林のねを人をよしゆきとまめあらひよのねやそばゆる

文庫

ぬまとすむる様子がちゆうじゆのふくさに重たぬものがひゆ
八月十六日

卷之二

女高麗みやかわあおれ乃むさう神も内そり毛根葉のまきかあ
ひくふづく一きる

久松

きこふておもひことにせられりと往まれば其よはよりふを
女うむもひあみますと松の秋月のむくらへをかゝれつ
とみなし花のけりうふ殊風比事こととあれすとほん
白妙を、ねぐらに記と申す「嘗ふ種」を今宵ね下さる
名あわがひ志やく物まん女うむもまれのうちかくも
まことにあれあるかとみなじ殊よりゆくにあふとまもれ

卷之三

漢書

三川村
見え
よみぐれ

秋の風よあめぬあんをまへ一花の名をあまちひうち
きみかへ一とあるあるれ松むとどめにやくとて淮とま御さん
お裁うどまなへ一侍も。而も
女言花匂ははうとあるとをわうおひらくれ侍へがゆる
すはひのくりあり一せくれつるとれアとれく
あれうれ侍ふ乃かさへにまほくと
とこまじ花のそりうね拘れしのふあくを思うせしにもせ
そくら後赤のむすびキササギとがよへ一侍クタ絶
えんえあにかくへ一母とひくゆるさねあひたわ
なん侍ぐ。

法全のせうゑのとくべ一絶め一まれにま伐きて
ざまなくわうきん枝方とてにまやうを伐れをひ出せサ

返一
女言をかうモだははくとくき物をうれくお
妹奇下

三峰
大作
批把
左大作
佐勢

歌一より
夏をうはせめんたとやまねうらあくねのゑみねじ持後川る
秋風ふあひと、り一花をうたつまくかく不すそ出ひ
寛平時時きまのちやせ奇合ふ

よみく
左原栗

たのへりす

をれすすす樹よ生やひせまなれの身ふるとひれまれかに
株風すけそれどひれどひれくかねをうるかまふそゆゆる

よみく
左原栗

歌一らも

株風うきうどひかでくるかせよくうね解をとあえ
物おりふく月日のゆくを一らけりけりてまく株と若れ
やまやにあがきるつるくと
あぐねのゆづる風よかく衣あ前田のやぶるまみちに

よみく
左原栗

歌一らす

秋風みはそいれりて翁うりかねをわらひ人のやと成らうなん
たまきせけとなくからぬそ我らのかなりすぐるくとけり
けりくりあらかじを極むれやむる林とてあり とくのく
林とてくれとくまへれまぬと變ふるてりがうどみをもく
ひこちうに山うおりあくふとあれきりうどみゆわらん

人のかうへきに意るとりのほときて

せりておもゆまくぬあうかねいあらはうや林とて見覽

やあくすまゆきふ時れこととをやす

天川うぢとうよれは不せたあま場をむくももつてよまう
若猶経はなとか将午候る時むきしゆくむりよゆ
りた角日みへきたまくるやありてかうりすかあーつさ

のむねあくむりふあうりてあふさううり酒屋とく下

すすひかくりむりまか

歌一らす

山をせうみあう山の草も林に於くうとにアそあうたまうりれ
林の聲ゑにまかとみゆうだと坐丈、蟲にそめーと思ふふ
あはの、ふゆうれ、蟲がときめはちの草葉はきうらう聲
ゆき残りわあてあのもん林の聲ふうれらんをく色うる草
アをあてなき持うね、お林さうにあすとひきお林ふわあ枝を
あれせけと旅するれよはうりうね志ねい終とるあまの風ふうりれ
おもくすうせとせれむとね志ねい終とるあまの風ふうりれ
初とそれあまの山をそおまやゆ。ひきあがくま前もくさん
ひわうひもとくともをとたまら今そお葉のあきとくらう
うそくはせをあうたの蟲あじてりきの山城を尽くす
みふとれ、蟲ふるたるがれも山ひやむもと山をまざん
ありさうりはの山を林きうれああうておはやまこアはくも
もくがくともいづれあとう候きん

君とわきふりせの山を林くれもひだりやねま物ふを有う

ほらす

源宗千
於

影ノ山

さくらとくまほく山あみちやまくわせなむに山あやさるん
立田山城ああとく
かくちうまみほふらはなづかひき立田の山とくらむ

たひくらむ

あくアラモ立田の山せりみちやねとふ人のたまとへ斗ミ
立山城こあとて

はら
まつま山城

うち衣あけの山を今よりみ地からうじと紀のなうらえん
立田のやらせお葉をはるのをなまめきくらう
人へを絶ど力手をぬつとまうれくもふすませりみ
ちばこれよえりきるに

影ノ山

みね

松木のむら山を被をなしてやまたさうがくあくま
なむけに株うどんうみがく立田の山あみちするとを
あむとくわんなくにゆみちの城をのりのれ松くられを

ほく

もううら山の城をもうけみわるふうね
株きくはきくさはお葉つむくらくへてちうねへらう

まく

かくら山ややかだくもうまくれとおまわくと葉をくとまく
とくにゆみけまるとだせうかのまくみわくとまく
つるやうたうきれはくわあとくでくまくとく

まく

かくら山やうひとのくはくまくおまわくと葉をくとまく

影ノ山

まく

あくまきせうねうのまくがにくわにくわを

まく

うれせうふとくわくわくわくにまくせの身をもあふるまく

影ノ山

春の先あう月かくにさかくれいひは生ちる物やあるよす よみ人
なみどりと青とキモチたまひまくいきとせんり
やうせきくさうつへく
あまはまをわれれまむれのまひあくらうおもへれ
かとのひはくらはまくさうされ
あはまくはくまくはくまくはくまくはくまくはく
月夜半よりみちせちふとる
お葉をたちて生れられあう月せむの月乃うらをまら
歌くらは

いくみどれをうねの山とて風ふみゆきうきをまん
あ飛さうに峰の山とあぐれをくねりまくね人をあま
りみ地を残けつゝゆまへあきてあがみとくやみくん
きむねくさわきめくらがくやまくまくまくまくまくまく
山風せあれのまくはくまくはくまくはくまくはく
歌のよにゆとまくすりまく風ふみゆきまくはくまくはく
歌くらは

立ようてみゆき人のあれまうそ峰のはやにあたをくらめ
木の力や手をうなじめあつまむいよの林のりと地へくう
あき風ふちあをみちて女をむやくにどうしき行あへくう
是の山の山のみち葉散ふきうあじのまくみくはく物残
お葉をかやしく峰の山道うねまくやまくはくまくはく
立間うくれな井干たうにうる山のお葉を今がゆうじ
竜田川あきにうれい山ちうみなうくと水もお葉うえきう
紅葉をのからく峰をうてめきはくと人々みくらん
あくと川わきい水をくはせなんわくぬみちは流れゆく
活かてみあとうりれりうれりのむるゆもお葉ちるやと
あせうちれらにあくと峰をあれお葉に花は咲まくひく
わかられ神あたむくお山ひめねととくとくみちといひ
日くじのアカヒヒとくとくあるい秋夕くわなまくはあく
風のとくれくありと峰やせめつん吹くることにてるのわひ
お葉をかたむれかの波よ月の鏡うそうつるをくら

あひあうてはまるかとのふうとひすけりされ
なまう月をくりにつくつゝとあれ

おやうの株のあたひにまおねやひきるゑふ有氣

歌へらす

おとく物思ひきしゑ蟲のを成ゆうにわがわりつて
あひゆうてゆきまく人のち／＼まくとす放すされ
おとくのれあきてあ伐まがりとくとくとぬときて
後うあくせたうされ

株あうみよふかみよく白蟲せありとめ葉にあふれん

かれよきるかとのあたどくさるに

とふとの林／＼まねよきとめおひづくよやわきと人のもれを

きみちとくらこんどとば女のりとつづいて

年年女
のむき
のむき

君こふぶ汲りぬりわら袖や株のきみちとむき増ゆ

歌へらす

てる月の株一葉こゑにあけまへちるふ葉を成根もみぢり ほれ

故ふやの内竹ふく板をけ根にあのひてやどひひの葉を
あととくとてくじつ草く内竹ふくらへきる
をやわらぎ下りみ地となににんお除し歎の枝ふこうをあれ
株をなる根これれ物くらーはあひとかくせは後り
はれ

源
とく

ありらひる一丈物とくにかねのひつこむくにゆくゆくらん

菊のあれかれあくそ人のひゆきれり

とくに露みぞくからむくとすくらぬ人やかき舞

源
とく

おのなうりてぬくれやかけ支拂うと事かと後まゐる

源
とく

せまうをくよりいりにそととひとさせく拂うされ

源
とく

返すにまくせ花とあうてつづりとある

源
とく

枝ふ葉をうねるふ林の花みまつてわりかく放ぬ風うえ

源
とく

あつくりよひのぬてふ花をれふ林ふそほい風うん

シテ
源
とく

なんまの葉と絆株のうごめりありまれりまけ

妹の月光さゑ未みちをせ落あれまみくらるかれ
歌一うち

あめりせにつらとを解きぬくりあねにまゆるよも勢しさまうす
かとこのむねりつらゆんとてまくせありとゆくとそろふる

アツラハタリきれり花ふくらべつらハキテ

みふ人すかられふうと花は花若いためふををぬけ

歌一うち

あく風ふまくするふやや妹のよせ月のうづきよりこくらん

りみちせぢりのひる本のとをほく

お葉をちかふ木のとをほくすゆく妹や背地あくらま
わすれふきるかとこゑ紅葉残ありてさくりけりれなうくら

思ひ残すとふすとあじ妹を向かうのうだりとみするなるとん

ふう月のつりこよせ日お葉アヒお哉つまことこせく

けりきれい

宇治山のむみち残りほの長月せむせ日残葉志うすをあは

ちうねう
むちうり

九月つもこうりう

あう月の五月せ月をありぬくをうねく妹ハヨムの葉くふ梨

おみーほくもりた

ほくと秋の秋をすくねんかくりあくぬ葉くハ秋そと葉元

を哥

歌一うち

初一く生あれへ山邊林をも海ゆふひまゐくとま夷カみづん
ちやくれすやどりかくはほ山ノ手を夷あづぬくうらひゆ
秋せ月せり三すみさよめあ支財夜を冬のは經あうる
みえきはるの月せ年ゐ家田病も松ねぐに青枝をなづける
ひとりぬふ人のきかへに秋あつまみひら年も布於初一くれうる
妹をそとあくまうりぬふわきなれいちらとのひ残ゆうらこ年
をく風をぬれもとづねと冬くれいひとりぬるねの才みそとしげる
松墨くわくとくまふあうねきひとみの葉さくふうけりひよきる
かく月志くれをうりへおくじゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

神無月ノ月と申すのみあひの社乃本の山にありて丁度

女りつらやまきれ

秋葉木もかき木そねれハ作無月時及ふの山もねりて落葉

山のふとす

神無月志されをうれ成れみれどくらぬ山落木をあれき

十月ちうくすに千古の山にあんとせはうりなすけ

れとも竹の花をねりてうまくきてた川ねくまやうれ

落木ちう葉のれと落木とルルとこそを時々とりゆかうてそば

返す

至み地すもあれ葉つじまれみさすゆん人をあやとめぬ

歌しらば

神無月がえりとやおひ葉を山やむと江もあくよあきくみ家

ちやあれ神山の山うなぎあわ時々よほりもからうきうきり

走らぬ家までさくすみ葉にうねていひづらやまきれ

人あまほあれあれあれと落木とこれ今そ本の山のみきぎりける

うえー

あみくらむあれみ松ひすす山里をねまむともあさはま歌 住勢

歌一言あ

冬の池志かもせうの毛をさくあは消く物思ふばみも有ら事

おやのほうに下りてとそくうきれへつるやまきる

か三ヶ月あられあるひをくす日成玉をまわとくふじとそよふ

まふすとま

少とくとおやざくらむあくぐのとせまさくおがきもゆくらぬ

冬の日まくにつらやまきる

人志れあらふてまてわう袖力きやうとすあれ水ふかく

歌一らば

かくとじあらまゆう志け白玉を一束の庄と人の山くく
神無月志くあ財をみうの山がみゆかもゆはめきれ
くの山の峯さもくもゆるかれ是行の山うなぐきうるそ岸に
黒髪せきくをうりぬりあれまく初音をあれと春を

塔基
法界

大和
子古
吉良
大和
子古
吉良

批把
古大和

あられ常るみ山の里廿二ひままでたひまもくやふ人そなま
ちやあれみ五月ア替筑一ノれゑ第一くれゆうねと思へ
式旅卿敦宗のみこ思ひてよよとアろは是れをのちくも
くにすり付ケルはもうとある事多きのみこせむとよけ
ア後へいづみをゆうりきれへ替の返すに女

あら山みゆかうねまへあとと今ひあ一ちに人々もるちに夢
かとあーたお残あけまて

ゆう初々をまうめむをうを舞ゑゑ黒うみ志がひるをうき葉

返

黒うみのひなすりやあふるゆやせ仕事りをひうとく替有る

又

く後發と零とあやはうきれりがみをもつじとぞおりよ

クえ

さうとひまくは盡れどすかみだるゆを古の支ハモリ乃

歌へらす

年あれともひもがひ勞ねりえす先きのひ草成もと一替られ
あられの枝とれりひとあくゆめをまくねばうひそとてそされ
水ト井のひもじもみすよし山のあま川せん傍をまくとま
秋成さむとねまくまくせをうそゆねひもひくひくあやまん

君せまじひう日女につうひ一まみ

前まくとくみみあらひゆまくね思ふ人のあらひあうきう

作氏移居のかう一てゑれまくねうはうけまとまくと
あうゆきのゆうもて一替とひまくらとくふ使うとまくあられ若

歌へらす

累ひつねなくにあく移居の夜は袖乃と身へとすともうる。或
あらゆのととわうてひうりとすりつまちねまくね一ら山
ゆ一をせまほほひすすりとするね鴨の今夜は春みゆにほすん
白や云れかわる山とみ川あらひうつせうるのまくねまくね
左空内方舞を花とそあはるふなうむ我もかわひまくと
なうれゆくみ水ねふをまくやねうれのあくととせん勢

後
歌

後
歌

ひあておみそでせわらめ白のいつきうれせちぢみま
すほそいこゑりにともれやるにあまにまとまもせぬ
よがふす宮のよれい我若比ねどもいねくとふぐもあ
きのよゑはみみなうあわや鷗あうにねあうに年よへは後
山ちうしめつとせんくあるゆきせきくやなん年つりあ
れの葉にうれしむかくとまをとくをせせしりふ風あうえ
あうゆえいきてもあたととらなん能もをみちも枝ふをなほ
渓川流なぐらうめあちにあれと水とけねへゆくかくもあ
う雪にね思ふわうせかくとあやつりてきくねたうせ
夜あくの月とそしに我若はを一ぬも、すすつを教書
あらえみゆうとまふ雪城もとをめうちりをひからせみ
のつづくと山のさくらもわらてくね、内されくみま成まりしん
せりからくゆうつむおとをうる時をあめ白霜よすじて地も家
年くれてまわまきにねまきにねのためにアがくら宿
まちうくあるあらゆあらく山とねかをれのけうね

ち今の事
みせいあにまゆめとくわつまく下にうよんへよあくすれ
むと玉の秋はまゆまでもあやめの秋月秋月はそゑたう斗^ト
あの月比うりあまうにあくほんにそくのあなまくあ
闇こゆる道とかかみちうなううとにさくとてまをまく事も
みきくきとく別あキとくとくまくいわう竹くと
たああきて林のやうのたはすりつこそを寒日つうやう
お思ゆる月日をもくねまますあくもいきあよほくねとくまく

玄一

かくとあひあくて竹年とくすつもみあつて又
あひくくけられ
東流のまやれあう山やくみあひそそのちせわひくらま斗^ト
あひひくさきく人アねくうーー竹きと人めさくう全
けくはアウクうとつうーきく
あくきとあひいひんこうれよひもととあせわひくもく
深おれきうかよひしがくらばのちくをあうじたう竹

源宗平
大和

夏秋敷
はす
ゆ支

けまくとさりせう廻のああどうおもむとまくうにみく

つうへーきよ

まやかすねうめも人とみ川ふれぬまやかなまの夜や夏
すまう

あひあひて候本あ人のりをすほそんとてはらに

斗ふ

くやおき青タクルヒト今とてしるふらむとくまきやけゆ

返へ

タくねねを手がまう躊躇のとあるあら葉よみの黒いん

やまくよらひあうてけたる人のりにつけやまき

おうへたれ持とひまやるとあるあるれよのとひゆくつ

うへ

様の異いよとく成りけりうどひの前まうれけをあい

女キつちへーける

へふねんをうへとれあうち我をつきあくねこくう

乃がふとこねあくせん候うへろ又あひへとて候ま

元良の
みこ

かとせりとより日はうねまひくうせすなると

ちなんあひつやくへりされり

ありし川あへはあうれ水のうれうとがくふあにてまくらや

いせ

歌一言あ

ふひやあんちつ徳平かくへもあか坂の家あはるらるくふ

女よつわーきよ

まいたくとくはうへくやうとて君代思ひのあすふりの

くへ

思ひぬに志はしてあわうめうせあひなけあの教ひ

歌一言あ

やりとくにぬきぬへとくれから衣くらうたりとのまにあきねも

よゆくりああくへ川のきくれのそくの経とづくねそじゆき

我とくあひがほ人のをゆくまの弟へ紀ごくらかひをうりくる

うへきり松山平今ひととておゆるをくみかみを神うめ

女のりくにつうへーきよ

人こそいはことうちさきへたひをちせけぬまよひとおひは
むちひあへわへあひり思今まではどせぬ人のおひぬまうき

女のんせりやにつるべ一けだ

ほく北風をぬくゆきじふをまかのうやちをわらすたうき

返一

あちせ葉をゆきやうみをゆくわらまひとれによるがくをふ

歌へらは

ひうすま内を寝あま後とけお風を消くづぼせ城そばむゑ

ある而キアムミトイヒル人のりとてつらへきる

お前とぬはときけのやととめにみあめ外してとせはぬらん

お前とのみこまうてまたうけとくらひすーでくーて

又おわーもキツアーナ夏

かく衣をとくりはなまほくらと衣とかのひとうらむらんと

かひとちけら人のひさーくせん指となくつけま

アリヤニキは

ほら
ゆき

新あたをゆくすなりけ山の井をあさむようすくみやせえ過

あへー

あはーてあすとゆしみ出方井へりしみこうよ新の足へぬそ

キムシトムア

ゆくひりいく田のうらに立つれ道おわり身残れぬはらん

返一

立りくりはまくひぬあまをねぐ田の消れさきとこそれ

女のりきす

あふごとひとよまぬりた空に立名のじてやくねたうりう

返一

立りあくらやまんくせぬあゆの今こそ雲のあくぬめぬ

又れと

今おもむたのむなれもよがのあくぬめぬあんとじた

あへー

とやこせぬぬきあれづちの水のまかうんとまおりわゆるか

後撰

上三十四

歌あらう

夏かくすみる年をとむのうちにあるよあられを
みぞれすくいしむのかふ衣あおしてせるよなむ
女のやまとつら一けふ
かれも内ふをのこらむほりうて時をわからぬとお詫ふ

返一

あさにうねちゆゑんがたゑふみあらひまゆる花の霞
そのほとにうへりこんとてきめ平はうきる人のやまと
すくーとこさりけまひつりーとお詫

ク一

月日戻をかきくあああれゑふお殺とをあらぬ我以てりう
女うどーとくとくこらきらあよばのこまひとくする
そんあを戻してとむまちくとせとくせめけふとせせ
とくとくれくわくよるまでとつまくくけうまれり

本のめの不善れせり戻れおきし思ひやほん人れこひーき
あらきーわうあうえあいにけりある女のりとん
つぶれーとあれ

返一

人ふふふなみあおと云我ゆるみまむせとぬをひのうち戻と
かとあのとがと年がまむととと戻れかくてつまほ
もどくさうきやれとんふもゆとせれあるこをまふ名を
くるとうらみ侍りお返すう

婿大島

つじとまひくらさん本とまほにうやとちうくなく想へせ

原あむ

里こむにをまえと我れ御不すこうけとめぬゑと
えうこからくき女とおひひうけてつらーとお
故をらぬみやかくれれほとまほぐれぬよとあだつそす
よーのひある女うあひきとひてのち人めふつそ

ももも
アモモ

又あひうそく竹んれ

六
卷之六

又おひくと仕合へ
あふすのうきとおどりかあくらむせをもうなみよりをん
女のゆきよりわまれまにふを残つまくまとせまく竹

卷之二

おゆよとへるわ馬にとりて日ひをすき草花ふやいあく牧
返一

3
木立のなかであります。今まつますから元氣を有り
平穏えりゆきより左にあります。まちはとひ送

卷之三

うらつらじゆくめかるてああほ身のなにうれ波のあくともゆ

近ノ
君代がりてあきらめふはのくに思はうてみだり我をやうね
くわうきふくらうすまくへまくへ

くの如きを承へりはうへりと申す
まことにあらゆる事とあらず不うくもつらむとひりん

空少

とをすれりみてくら角くづのにまじあみんがあわらうとうふき
思ひくるふつうやきを
とも深ふかくと食くるとあうち考かし人のこねまへふくれて終おひる
人とあひくもくのちひきせうせうおもつりおもつりさとま
きれを

うれしくて喜んだのもつかないまゝに、水みそ有り

がすね多改ふまよふたのれにひてはをかそをもる
身ひやくあはれと成み残ゑきあとのまくモアゆる
ほよの身もやらばよかわあノのよ肩目みなそくかき
もとぬれみず袖のかくぬをおりひのやうすいあれひえき
あひさり时へりなじわとてうたとせドはまもとねひをき
せゆけ多ふこひの作もおと身をの後れあひぬえたり
あひとのこつりまするみ山まれひあひのねみめにほね日ひほ
るよもりわうおそつてもよまれひえすの無と思ひけやも

れどこのもとやく女のあいに付せてあらぬ事
此處手をついておまかせ

此の手通りとつたとき既

返し

卷之三

おどにまつて経るやうにあふみへゆけ
あめんぢきする女のねぐらひとをあうる

つうへいきよめ

卷之三

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper, possibly from a book cover or endpaper. The paper has a textured appearance with visible fibers and some minor discoloration or foxing, particularly towards the edges. There are also a few small, dark spots or stains scattered across the surface.

とくにす

致一
一
一
一
一

身をうかがひはわくそむもあふぐくすいひぐわ成

人本つらへとあふ

あさちよのあめのうゑふをとけますてなまくらへのゑき
ゑやうね軒のあまみ教へ是す教へきよたまうちるアモロ

こころうへゆきやうにまことゆゑひんたりといひタれ
いせのうみすちくわもあまたあくようかあをへておとす事よ

人よつちりまう

はおれもお組のふりにま
かく、ふふねとあうせんよあいをきてゆきの消えゆ處あらすと
あひもへん歎を嘆ますありててあらわすかう

思ひのとおりなまきもあむなうきやか川むほらうそ遠き
女かわくとてつらや一牛家

女めりとにつくらふ事

わくつうみふかあらぬるのたまうせんひやくとくにじりせん
水上千いのれりひたゞく後川うねるも人とよしのゆきんぐか那

返

いわく見るより神を抱くよりはるか景の如くに
大柄ふうへきをあ

七

君のとねも玉森のとねもかくうるぬ時に事にうるがわを
かととのあんとてこまうりやれ
山里のまね乃ひくらまくらあめゆくとまほくすよう
ちうやそ女のりとたつうやサふ
ゆくおもあくせられぬ山をせひまほくもおゆふゆるが
女手はうづりけふ

三

人のうへがまじらへあらぬもふを、意のうへうへそち

卷之二

さんあみつうへー半嶺

たとくのりくにつくべき事

卷之三

アガルに女の人アラモチマリハツミ

文
書

往よおうとおもひたうせはめ

うれみをはらふ支那のあやまひ終ふくに夏のみゆるへう
女のあいに竹ノけあす
毛宿のとくあさくにちよりて終モみしわを締モサ生前
男よつらへ一牛耕
なうくべだくね生てふも云のむはあう経へいてあわれう

五言二

女のあいに竹ノけあすはらへ一牛歎

人をほぐ思ふおもひ素あら物残すかゑう持てきぬありきる
かううおきおもひくじゆらにれかへて落ふ人さへ一風ん
わうあら前あらひてうるぬ人とわざひやりつゝ意アホアム
まきゆ一わらくとまれ女アつらへ一木耕
無残ヨラみやふ丁持出す花木を支那あら平緒ハさうめや
人ヒツヒチモモシモモシモ
あ一寒の山もあはくは高の原もて思す我と一らひや
あくれば身無ひとひぬわるくらふ井あら風と秋や一木耕

源中止
左行
左行
左行
左行

女のあいに竹ノけあすはらへ一牛歎モ思ひそめち
あふく門はまうとのあ一めをひくとれうつと残すあくふ
かうつうひせとも返すもせキアキ奈女のもすき
はらへ一木耕

箇やタモいよふをゆくれひりげてうらどひやせくま
くふもちうをくもせまう半身につらへきま
とくふもよこかの筆走るくねうかひづは蟲のあうとくま
まくまくまくま

返へ

大浦
橋の仲
左京

布地せと煮ひをあはすあまくとてねは波江と名
又
あはすにあ残おいたまはれをうれす支那もなれあ寄と
わきとはまあるてとくもひひすれ候る女ふ
ふもあらて人ふさやひねすアサヒにうれへとお井えま

おうれつけすまほうひー斗歎

あゝよき教人のこと経とおつわせとけふ物とをあのこ斗歎
ひひーともくわく東京女とひまくうどひにむけられはひう

なんわひ竹と人かつけ竹年れり

嘗た玄井平わひすめな舞とま共さうと移我とまく川原
あゝかよひーきる女のと人千らひねとむてつうひーある

かくもうつねあれ世とあうあらんざるがふゆあはまき舞

おとこのあさりきねだつまくー斗歎

おうせのあとむらあくねあうんかちまなれの約もこねが
おうせ

おうせ

を残うみのわいと消ゆるオカあきらうむと移教あがきる
わ前とくめりー車もあきなれ我とくらめあらうわむ 以歩

人のゆきうつらひー斗歎

東波志の、あけりけくわいとひわるをあら人のを支

源考
左大臣

あらせ戸とらまぬといひありやかな行つる名せむ

衣もだらぬまくわひつゝが衣あはう山中道まくひす

おとこふはうりーきれ

あまくとまあやかとのうそくはよ敷のあまくはん地とす經

女のゆきうつらひー斗歎

おにのゆきうつらひー斗歎

あれ成おもひ辱してあうとりうかの返すにつうか
まれ

島浦
右大臣

をくひうくつもあわのあつこせととぞ成るや辱に

をくひととくらす下がりきれみちぢりすんじぬまくひす
とぞあへくつらひー斗歎

上四〇

あくや天をあふすがる雲のおまともねとも神そひの處
あひあうにすはれ人のみよりひさへとままで
ひだりをあまくまきあやとたうかまくはれ
つゝとをらんとそよゑにそもんやけねるときうまほ
人のりにあらうあらうまことあひうへはれいあす
うなつて年約りぬ

年ぬとてねぐくへもひくじゆくもせあはまう
おとこ竹女とせちすせせ竹子残女とヨリア
とりせキナ

わうあーとあそあ飛きうねれとあうたまひとみくわ
女のりまとうてなさうやと成さんえーらぬとひな
りあせ

我アヒトモサと思ひ田子せ箇不のん信の教とう持

ハシ

ツヒウトキれ女のりとまうをまことにすふすあう
れとづく年ぬ

東京業
平野居
新原
寺

色外へうれふをうも深くほおりふん残夜やみせらる
きめいたまひ年約女のりとあうつらうたらう
ことれあーとてほるのませきうけまへ又まへー牛久
足立の山井ち壽ともと通ふ歎ともとみゆくすき物残
お海つあね干し物のとアひつてケヌを竹に見さ
まきれつは年約
太うらなそやわうかのあからんむじせつらき人よ年あむ
かくー
かとひをわきも年約のわら竹を今もあひとせ
返すとけう年約女のりとめくうしてえく
旅のれいあひあくせたる年約今ちおだて持きくぬほれ
あかし不すくえうやれうらえあひう斗象女
れと見とすわうぬ中にあくまへ以ててね思ふ波たうさう
年約うう年約年約年約年約年約年約年約年約年約
あノ云になまりううれまふのこゆわうつあよすもくぬ

萬葉
新原

住のえれあみふもあらぬと秋とりみん残る平よ勢わる鶯

玄勝平つるや一キ風

見ぬやとふくせうれをあふもの年はるかにむすむ可不

アツクやく清あまつうへーとくきれ

余ふあまい志前ゆ揚我言ふくも門をいそてゑうとは

侍モー

うほふ特とづくうき難景とのみゆと山種やもみうきえ

歌くにあ

あんそいゆく才もあ海川ヨリ風めうりやがまうれすし荷
糸ひのねうどんの名あたむたれまみもじぬへふなう
渡手をおりひのきむる相あへいとかくむひこくさうほ
きうなれ思ひやる地とある門のまふ門までにらひは便き
さうかまくかまくよしむる人ぶつうや一キ不

玉のきえもみうれ今もてとく月長まちひもするえ

歌くにあ

わきのとやりぬまてきくなんことうりに思ひもたくぬみねせと

返一

冠士のねあもむくふとまいうさんもく度あくね水ならぬハ
んせせれ女のあれあうにアラウていひは侍半邊

侍つるゑ我物へ西露をあくたる度あくね水半邊

歌くにあ

みるめう歌ふたきやわとああむこまよどもあらぬ象化へ
車そ不なるとくふとめりに女ともれひまむ半

おやの戸をさうてゆくうにうれひ又のほりあふつへ

一斗瓶

唱戸おうけいとされ、舟を金を我てよく、なまんせせ

歌くにあ

すみのとねあくらまかア年不人のこと強とれみ年うる
長喟のみせ母志文衣さむに侍るふつう一キ風

よおにのとまむひをうき住のえれゆまてさうせみまく新れ

後撰

魚の音

等外音

うき波ふ不見りうじや波ちとうが来りらぬ夜不また父ん

あると後へもうあうちえあふまゝかげ不人不ほり

ちり年家

わのうみの夜のあううひもうねくかつまでせん宿のまそあま

あめれにつらべ一斗子

毛利宗景
毛利元就

つううとも思ひ持をぬ源川あうれぐ人をあめのむと絶を

返し

なうれてと仰ぐのもんをみ前うけとせくもおりや／＼くす

人をひひよ／＼ひてつらべ／＼くす

俗事と今いまおまんぢやあ乾杯もたすきぬわうお／＼年を

返し

手よお祝もみす持あれぬじさま／＼のれども／＼ぬま／＼

女のりをに仄かうなきけ子と／＼すく／＼傳うる

へつひと竹半丸

大庭宣利
大庭宣利

うらみくも心うそつうけが／＼夜をとまゆ川らに没く思へり

あひ／＼てはまよふ人といさ／＼うとひす／＼て夕か／＼う

川門より返／＼つらべ一宵

柳支

往のを思ねぬあめ地よ乾杯波乃か／＼かあがみやねのふりすらん

かとせりくとり今／＼あく／＼人あんをれり／＼うり斗せ

毛利元就

思ひん／＼たのゆ本をあるりとなまをとたなふわす最

あ／＼

ま日神せとふひの跡モリアラモとふになく／＼もつむ／＼地

歌

わすらまくありふた年きせ歳とや身とありみれとゆる業

人のこゝ後うつりに斗ねい

うこん

れもんとため／＼人聲ありとほくいひことひの聲ちあさん

さとくあめの聲はせみやめとア波きよかけの聲ほとみち

のくに／＼あく利とつ／＼とあくよみうりて今／＼よむ

歌譜

上四十三

「まどもうなきひづれ

まともなま成らむうああきねにまくもおめやおま

こと女めあめ成めれこんくひまゆみせきりぬ

うらみきる。不おのふものうちてうてつまきやーりる

あれひうらみゆをなめのとじろやくくのりのうらみ

ひうらみあいさうけの女すりうらしき

ありひきやわひ三敷て成前もとからすになまくもとは

とみつけねぎなうれをあとの後の宿もあくにそ有きる

ふ宿のとひあひきとくとれりちうひへぬ意をするば

尋へさんねをなくはせかばはあやまらぬめ代もみが

そくとひきうりゆくる女す

トタキを夜わる家宿のえきにとめるねあらなくア

歌へます

あふ車代ととあがふ是行のあはれふれ意をするがあ

かれりよにありけふへ平まほりみちたる枝かつゑと

源氏
清正

源氏
清正

源氏
清正

つうや一千秋

今つてふんづらの山星れも木も傷とりて持つうりうきれ

女のめめうかがりて殺ふつらーナ斗歎

かへりきんをもあきに燒きて山より出一月と月門す

五浦船はあひとくとつまゆーをあさうきる船ふ

ありとけぬゑり寄るのあつくゆー被ふとけぬ水に斗葉

かくさくり斗葉を後たくアラカムとす

后とれをもねのゑー支君ときてあやや歲末かねくん

かすいやあく年たくふれをりせもせと日ふか度ふをみくじ

あのひくやうひはる女のめとくがまきとせくとくと

えまの

あはせ

のみこ

あくに

あふとれを山をせり衣もくもうひな死士とのみを鳴

あくとれおりあくらびのねをとふ人ふあわんとそよぶ

おのひくあひとくがまきとく

いきりやうひよのうのうかとつあつらのあたにくね

えまの

あはせ

源氏
清正

源氏
清正

源氏
清正

源氏
清正

寛平のみくを声ノトカラモセシ風うてのころ夜惜の
ゆくりにのこんちよみうせ経くちくうしめーとお

られさす半世からむ事あはれもむきひつと席

えよりおけあせひくう近くれと寝るふアその園城寺(院)

カハ案
芦名不

かとこのあそびつらやーきる

我袖のなや門を傷の松山う持らうほのあく夜月(月) とさ

月成あれといふをいもまうとふ人のありきれ

ほん

宿ねの月ひきまことにかは居つ月成春といみそくね川(川)

ほん

かとこれりまきつらやーきる

ゆうめきかほれをうちてひうみせよむり入づれあき

むりめく人手のこまひつらーしれ

人世くよふるの耳中より挂思ひつゝち乃山をみる

ち所(所)よんとまくほりやーけふ

たよしにあらぬるひのあゆあいん成古(古)年はくるべ年

お^ス支

人のひゑようね見平ひつあくまよみてこころつまに

お^ス支

まくはれたまくたうみとひうみひりてまくの
あすーとまくとつらー牛

人つらにあはれあやかくか木檣のあやうもあら思ふを有等

ひとひひうけくん地もあらひや有まんいのをいとひ

一と日くるれいおはもあらすとせまくはるひうけくら女

のすとようなとかくまくとひて竹ノ内

いまとよんあう持たばはれすたれも原(原)よりはてゆりき

ふうサくはれといひつらんがともあくつまこまきま

そくきれつらやー牛

かとうせまよまくとひうみをむ想はゆりてあたきさん

おととの女子みまつておもむれぬみと有る

又つらうかる

かとあくてあらたみとまつておもむれぬみと有る

男の月ひきよまでまて今なんまくまくあたきひ
て竹牛(牛)をまく

草戸へあわせひ風の年月乃うむらうて拂りうなん

おやこせらとあさうあううまでまくまく君もおれ乃
いとつまに十度の山こみうなんかさうせん

さうりあといひへやうきれいよひのくねをといひす

かくへつうやあらうはくせんとせまうきゆ

土御門天皇 勅撰

新古今和歌集

寸珍形
全二冊

近日出版

本居春庭著

岡本保孝標註

増補

標準

河合やまと

小
全二冊

清水濱臣増補

加部巖夫校訂

正四位男爵高崎正風序

交際

婦女のいはし

插画美本
洋裝一冊

必携

文部省檢定係加部巖夫著

